



朗読音声のダウンロード
Audio download

LEVEL 3 Web Tadoku Books

三話 さんわ
徒然草 つれづれぐさ

よ まえ
★読む前に Before you read

《多読の読み方》

多読とは、とてもやさしい本から楽しくたくさん読んで日本語を身につけていく方法です。

次の4つのルールを守って楽しく読みましょう。

1. やさしいレベルから読む
2. 辞書を引かないで読む
3. わからないところは、とばして読む
4. 進まなくなったら、他の本を読む



《How to do Tadoku》

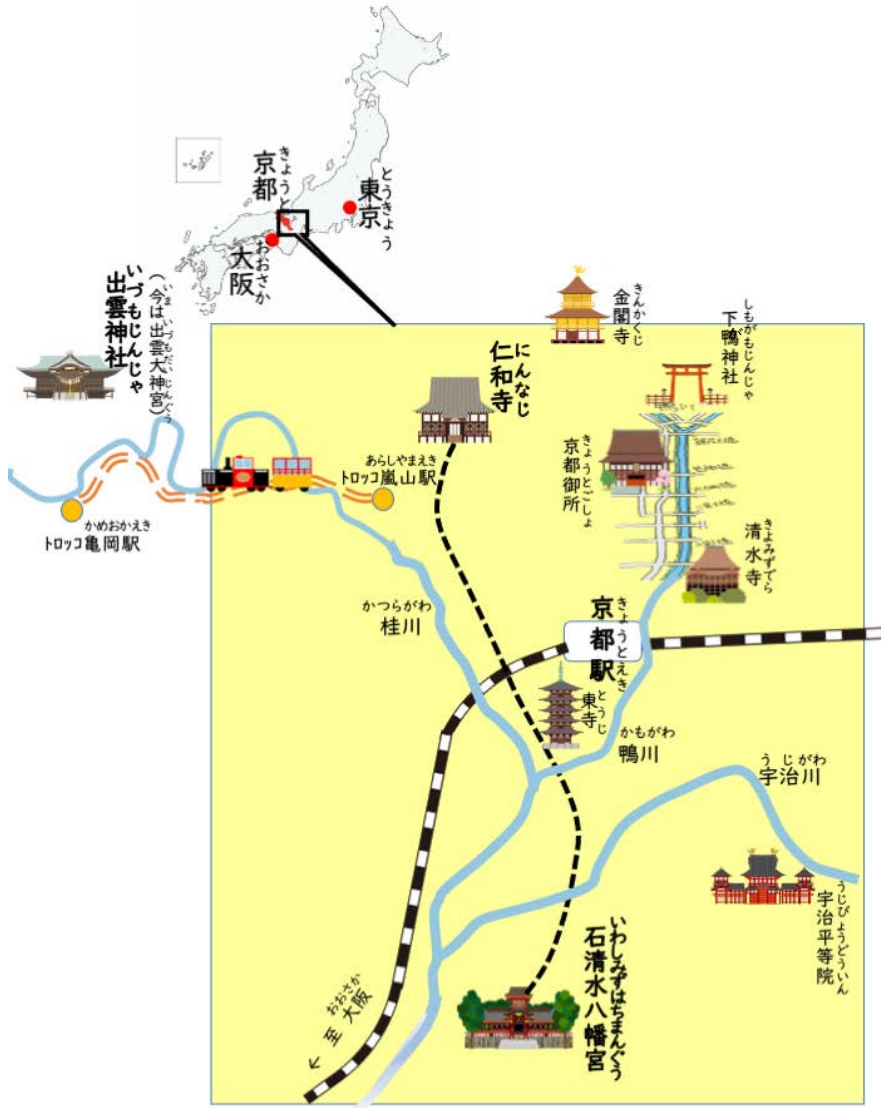
Tadoku recommends that everyone should start with very easy books and enjoy a lot of them following the 'Four Golden Rules' below.

1. Start from scratch.
2. Don't use a dictionary.
3. Skip over difficult words, phrases and passages.
4. When the going gets tough, quit the book and pick up another.



げんさく けんこう
原作＝兼好

仁和寺、石清水八幡宮、出雲神社の地図



『徒然草』と作者について
 『徒然草』は、鎌倉時代（一一八五〜一三三三）の終わり頃、兼好が書きました。

「つれづれなるままに（暇ですることもないので）」という文で始まって、兼好が思ったことや考えたこと、人から聞いたことや見たことなどを書いたものです。このような読みものを「随筆」と言います。

『徒然草』には、仏教のことや、不思議な話、人の生き方など、二百四十三の話があります。七百年前のものですが、人々の暮らしや気持ちも、今の私たちにも、よくわかります。

兼好は、若い時は天皇の下で働いていましたが、三十歳ぐらいの頃、お坊さんになり、京都の仁和寺の近くに住んでいたと言われています。

この本では、京都のお坊さんが出てくる面白い話を三話、紹介します。

一. どうして聞かなかったの？ (第五十二話)

京都の仁和寺に年をとったお坊さんがいました。

—— 私も年をとった。死ぬ前に、有名な石清水八幡宮に行ってみたく
とおも
と思っていました。

でも、石清水八幡宮は仁和寺から遠いです。歩いて行けるでしょうか。
お坊さんは心配でした。



—— でも行きたい、行きたい!! やっぱり行きたい!! ——

お坊さんは、ある日、遠い石清水八幡宮に一人で出かけました。

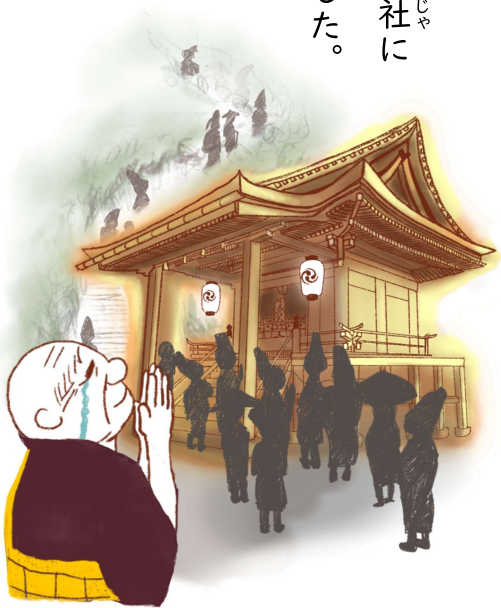
歩いて、歩いて、歩いて、やっと着きました。

「ここが石清水八幡宮か。おお、おお、すごい! わあ、立派だ!

それに何となくさんの人だろう!」

お坊さんは、山の下にあるお寺と神社に

お参りしました。お坊さんは幸せでした。





「ええっ！ 登らなかつたのか？ 知らなかつたのか？ 行く前にだれにも話を聞かなかつたのか？ 石清水八幡宮は山の上にあるんだよ！」

「えっ、えっ、山の上？ あんなにお参りしたいと思つていたのに」

お坊さんは、また歩いて仁和寺に帰つてきました。

友だちのお坊さんに石清水八幡宮へ行ったことを話しました。

「行つてきたよ。夢がなつてうれしかった」

「それはよかつた。ずっと行きたいと言つていたからね。それで、石清水八幡宮はどなんだつた？」

「それは言葉では言えないくらい立派だつた。素晴らしかつたよ！ お参りの人もいっぱいいて、とても賑やかだつた」

「うん、うん。それで？」

「でも、一つだけわからないことがあるんだ。お参りの人たちが、みんな、ぞろぞろ山に登つていくんだ。どうして、みんな、山に登つていったのかな？」

二・「猫又」って？（第八十九話）

京都のある家で、男の人たちが連歌の遊びをしていました。一人が短い歌を作ると、他の人がその歌に続けてまた短い歌を作ります。歌はどんどん長くなります。

夜遅くまで遊びました。

「ああ、楽しかったね。夜も遅くなった。

そろそろ帰ろうか？」

「そうだね。またやりましょう」

「今夜は月がなくて、真っ暗だね。

気をつけて帰ろう」

「そうだね。こんな夜だね。猫又が出てくるのは」



男の人たちの中に、お坊さんがいました。お坊さんは、聞きました。

「猫又って何？ 猫？」

「それが…動くのが速すぎて誰も見たことがないんだ。人を食べるんだって」

「ええっ！」

「ははは、大丈夫。猫又は山の中にいるから町には出てこないよ」

「いや、町にもいるらしいよ。年をとった猫が、猫又になって人を食べるんだよ」

お坊さんは、怖くなって聞きました。

「本当？ 坊さんも食べるかなあ」

「食べるぞ。食べるぞ。」

お坊さんも食べるぞ。わっはっは」



お坊さんのお寺は京都の中でもさびしいところにありました。
道は真つ暗で、その横を川が流れています。

お坊さんはその夜の連歌遊びで、とても上手に歌を作ったので、
たくさんのお土産をもらいました。そして、
歩きながら、猫又のことを考えました。

ときどき、風の吹く音や草の揺れる音がします。

そのたびに、お坊さんは、猫又かと思っ
てびくびくしました。

—— 怖いなあ。どうしよう、

猫又が出てきたら ——



その時です。

何かが動いて足にさわりました。

「出た！ 猫又だ！ わあ〜」

何かがお坊さんの首に飛びつきました。

「わあ〜、わあ〜！」

お坊さんは、川に落ちました。



「わあ、助けて！猫又だ！猫又に食べられる〜！」

その声を聞いた村人たちが明かりを持って家から出てきました。

「何だ？何だ？」

「あれ、お寺のお坊さんだ」

村の人々は川からお坊さんを

助け上げました。

お土産は、流れていってしまいました。



お坊さんは、

「ああ、死ぬところだった！怖かった！」

と言って、泣きながら家へ帰っていきました。

猫又はどこへ行っただんでしょうか？

いいえ、それは猫又ではありませんでした。

お坊さんのお寺の犬が、

「ご主人様が帰ってきました！」

と喜んで、お坊さんに飛びついただけなのです。



三・聖海上人の涙（第二百三十六話）

京都に、聖海上人という、とても立派なお坊さんが
いました。

ある日、若いお坊さんたちに、

「丹波の出雲神社にお参りに行くが、一緒に来るか？」

と言いました。

「行きたいです！」

「行きたいです！」

みんなまで歩いて、出雲神社に着きました。

お参りをしました。



若いお坊さんたちは言いました。

「とても立派でびっくりしました」

「本当に来てよかったです」

神社の前に狛犬の像がありました。

聖海上人が言いました。

「みんな、この狛犬を見なさい。この置き方は

普通ではない。反対向きだ。みんな、これを見て

何も思わないか？ これには、何か深いわけがある

のだろう」

上人は涙を浮かべています。

みんなも、

「本当にこんな狛犬は見たことがありません。





つれづれぐさ さんわ
徒然草 三話

発行年月日:2023年3月10日

原作:兼好

簡約・監修:NPO多言語多読

挿絵:池田あきつ

「京都に帰って友達に話しましょう」と言いました。絵を描く人もいました。そこに神社の人が歩いてきました。上人は、「この狛犬はどうして反対向きなのでしょう。きっと何か深いわけがあるのでしょよね。そのわけを教えてください」と言いました。神社の人は、「ああ、また、子どもたちがやったな。いつも、村の子どもたちが反対向きにしてしまうので、困っているんですよ」と答えると、狛犬を普通の向きに変えました。





tadoku.org



この作品はクリエイティブ・コモンズ表示-非営利-改変禁止4.0国際ライセンスの下に提供されています。

This book is licensed under CC BY-NC-ND 4.0

<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>